

WCS事業が育てる青少年の活動

～アウンサンスーチーさんとテーウーさんにお会いして～

吹田RC国際奉仕委員会

委員長 豊谷 久仁子

吹田RCでは2000～7年の8年間、WCS（世界社会奉仕）事業として、ミャンマー・エアワディ地域のパテインで5年間、中部のマンダレーで3年間に周辺の小学校や村に約145基の手動式ポンプ井戸を、そして50周年を迎えた2009年にはパテインにタンク付の深井戸2基を提供してきました。これは「ミャンマーの小学生に安心して飲める水を」という趣旨のもとに、児童個人の衛生状態を改善し、水源起因の死亡率を減少させることが目的です。ミャンマーでは乾季には飲料水の確保が困難で、毎日遠くまで水を汲みに行くのは子どもたちや女性の仕事です。そのため、学校で教育を受ける時間的、経済的余裕がないのは今も変わりません。

クラブでは毎年現地を訪れてモニタリングを繰り返し、また、RACのメンバーも参加して子どもたちと交流を重ねながら事業を進めてきました。この体験によりRACは今では独自の支援プログラムを展開しています。

そんな中、私は村で出会った我が子を抱く幼い少女の様子にショックを受けました。もし、この少女が学校に行き、知識を得て、自分の人生を自分で考えることが出来たなら、違った道を歩んでいたかもしれないと思ったからです。「少女が歩む人生は自分自身で選ぶものであってほしい」のです。そして、是非、若い人たちに共に考える機会をと思い、日本の少女が同世代のミャンマーの少女たちと交流を通じて相互支援を目指す「ミャンマー・スタディツアー」をガールスカウト大阪府支部は2007年より10か年計画で実施しています。毎年10名の高校生、大学生年代の少女を派遣し、孤児院や障害児センター、自立を目指す女子訓練センターやHIV患者との話し合いなどで交流や相互理解と支援を図っています。この事業がガールガイド・ガールスカウト世界連盟より評価され、日本で初めての「オレブ賞」を受賞いたしました。

この少女たちの活動をミャンマーでも高く評価していただき、第5回目になるミャンマー・スタディ



ツアーでは、1月2日に民主化の指導者であるアウンサンスーチーさんと面談する機会を得ました。各国の首脳が先を競って面会される中、外国の民間の少女たちが会うことは異例



のことです。

アウンサンスーチーさんはスカウトたちの質問にも一つひとつ丁寧に、わかり易く理論的に答えて下さり、一番大切なことは「教育」で最低限の読み書きと知識をつけ、その知識を共有することで生活の質が向上すると話されました。スカウトやヤングリーダーたちは貴重な経験とスーチーさんのまっすぐな生き方に深い感銘を受けました。ビルマの時代にはガールガイドがあり、ガイドとして活動されていたアウンサンスーチーさんとスカウトの“サイン”をして絆を深めました。

私はその後、首都ネピドーで政府、与党の連邦団結発展党（USDP）のテーウー総書記に10年ぶりにお会いしました。吹田RCのパテインでの事業で当時軍司令官だったテーウーさんは当時、外国人が村の中で事業をすることに対して反対意見もあった中、「国民のために」と言って許可してくださったのです。そのお礼とそれに続く少女たちの事業についてお話をし、今後の協力をお願いしました。

政治的には両端にいらっしゃるお二人ですが、国民を思う気持ちに変わりはなく、努力されている姿に尊敬の念を抱いております。

最初からロータリーの事業と青少年活動のガールスカウトの事業がこのような展開になるとは思ってもみませんでした。大人がその後ろ姿を見せることで、青少年は後を追いかけて、やがて独り歩きするのです。立場や年代は違っても、同じ線上、目指す方向が同じであればお互い協力することで大きな輪が広がると信じています。

